

2018 年度 神戸大学男女共同参画推進室 ユネスコチェアサマープログラム 感想・報告書
 2018 Kobe University Gender Equality Office UNESCO Chair Summer Program Reflection Report

学部・研究科 Faculty/School	学科・コース Course
保健学研究科	パブリックヘルス領域

(1) 見たこと/What you saw; (2) 考えたこと/What you thought; (3) 感じたこと/What you felt
今回のユネスコチェアサマープログラムに参加して自分が感じた点と今後の課題として残った点について述べる。
今回ユネスコチェアサマープログラムへの参加を通して感じたことは2つある。1つ目は災害への対応には国の文化や経済状況が大きく影響するということである。日本において頻繁に起こる災害についての対策や知識は災害教育により一般に広く知られている。災害教育により一般市民の防災意識も高く、事前に非常食を用意したりして災害時の備えをしている。しかし、今回のプログラムがおこなわれたインドネシアのジョグジャカルタでは、こうした各個人における防災意識がみられる機会はあまりなかった。この背景には政府やNGOから十分な援助が得られるということがありと考えられる。災害が起こった際に、外部からの援助が得られるため自分たちで準備をする必要性を感じないのである。災害が頻繁に起こっている地域ではあるが、住民への災害後の補償も政府によって手厚く行われている。また災害後に多く起こるメンタルヘルスへの対応でも文化的な要素が大きく関係するということを学んだ。日本では災害後のトラウマやPTSDなどのメンタルヘルスの問題への対応としては医師の診察やカウンセリングを受け治療していくという形がとられる。しかしインドネシアではメンタルヘルスの問題に対して宗教の観点から対応していくという方法がある。インドネシアの多くの方はイスラム教徒であり、宗教が生活に密接に関係している。そうしたことから宗教的リーダーが災害後のメンタルヘルスをサポートするということがありと知った。災害の対応や準備にはこれらの例のように国によって様々な違いがある。そうした違いについて理解した上で災害対策の在り方について共有し、お互いに学ぶということが重要だと感じた。
2つ目は災害時の対応についてのシミュレーションを通して協働することの必要性と難しさを感じた。災害が起こった時にどのようにして対応するのかのシミュレーションを組織レベルと地域レベルで、2回行った。1回目のシミュレーションでは政府やメディア、NGO、プライベートセクターなどの大きな組織レベルでの協働を想定して行った。その際に、重要なこととしてそれぞれの組織と情報共有、意識共有をいかにするかということがあり。効果的に協働するにはどのようなことが必要なのかということを考え共有するのが必要だと感じた。こうした連携なくしてはそれぞれの組織が自分のやりたい支援を行うことになり、結果として被災者のためにならない。被災者が必要としているニーズを見極め、それに対して組織が役割分担しながら支援を行うことが不可欠であり、難しい部分でもあると感じた。2回目の地域レベルでのシミュレーションでは自分の

担当する地域の特徴を見極め、刻々と変化する状況の中でいかに迅速に対応するかが求められた。地域の中で役割分担を行いその役割に求められることはなにか、どのような組織との協力をすれば必要としている支援を行うことができるかなどを考えなければいけなかった。これらのシミュレーションを通して、実際の現場ではさらに複雑で厳しい条件の中で判断をしなければならないということを考えさせられた。もし自分が実際に現場にいたらどのようなことで貢献できるのか、支援を行うにはどのくらいの人的資源や物的資源が必要かなど状況を具体的に想定してシミュレーションを行うことが大切だと感じた。日本では多くの災害キットなどが用意されており、災害時の医療機器などはある程度準備されていることが多い。しかしインドネシアではそうした医療機器が十分に準備されていない場合がある。そうした際に日常の中にあるものを代用して医療支援を行っていた。またインドネシアでは地域でのつながりが強く、同じ地域の中での助け合いの精神が根付いている。このような物的な面でも人的な面でもある資源をうまく活用できるような災害対策づくりが求められていると感じた。

今回のプログラムに参加して課題として残った点としては、今回のプログラムの特徴でもある「ジェンダーと脆弱性」について減災対策においてあまり深く学ぶことができなかった点である。講義の中では何度か触れられることもあり、参加者の一人として「ジェンダーと脆弱性」に注目しながら、プログラムに参加していた。しかし、実際の減災対策について学ぶことのできる施設見学では「ジェンダーと脆弱性」について言及する機会はあまり多くなく、その施設についての概要説明が多かった。実際に現場で「ジェンダーと脆弱性」に配慮した対策などがとられているのかはあまり明らかにすることができなかった。避難所でそうした特徴を配慮した支援が行われているということは聞いたが、支援を行っている側からの声しか聞くことができず、支援を受ける側としてはどのようなニーズがあったのかは分からなかった。今回のプログラムの特色である「ジェンダーと脆弱性」について講義だけでなく実際の現場や施設、地域の人がどのように考えているのかをもう少し詳しく学ぶことができるとよかった。